

## 灯りに想う

海に囲まれた日本の灯台の歴史は古い。平安時代、大陸に夢を馳せて船出した遣唐使のころより、灯台の記録は残っている。

命を賭けて大海にのぞみ、木の葉のように波間に漂い航行した人々を岸边に導いたのは、燃えさかる松明の炎だった。

平戸の港の突端に舟首のように鋭く積み上げられた石垣がある。これがオランダ人が築いた灯台の跡で「常灯の鼻」という。元和二年（一六一六）に築かれたものである。この灯台は正式な灯台でなくても、本にできた最初のものであると、今は亡き平戸の友は語った。だがその光力は低いもので、平戸の瀬戸の急流を越えて入港する船への便宜にすぎなかったと思われる。しかし夜を航海する人の心にどれだけ安らぎを与えたことだろう。

セブ島から鹿兒島に寄港した私たち船舶部隊は、橘丸(戦後南方インドネシアや方面にて、戦犯容疑で連合軍に捕まる)に乗船、荒天の中を基隆港に向かった。昭和十九年十一月三十日の夕刻だった。

出航して三日後、すさまじい台風に遭遇した。二昼夜にわたる激しい風雨に船体の損傷はひどく、乗船者の殆どが死を覚悟する状況だった。念仏を唱える者がいたが誰も笑わなかった。

空爆や、魚雷の攻撃による死亡なら諦めもつくが、台風による沈没死はいやだ、これでは万歳も言えねえと戦友のAは、荒れ狂う海に向かって激しく文句を言った。私は死ぬ前に今一度母の手打ち蕎麦を食べたい、そんなことを思った。母の蕎麦を打つ姿が瞼に浮かんだ。

(蕎麦好きの私は今でも旅に出ると、旨いと評判の店を探して食べるが、土谷や播磨釜の人が作る島の蕎麦より旨いものに出会ったことはない。出雲や信州のものより旨いものだからありがたい。あまり宣伝はしないが私はひそかに島の自慢としている)

十二月七日の未明「灯りが見えるぞー」と叫ぶ、航海士の声が聞こえた。台湾海峡の藻屑を覚悟していた一同にとって、ほのかに見えた基隆の灯台の灯りは、今でも戦友会の語り草となっている。

あの時代を回顧するとき、その時の戦友たちの行動、表情が今もくっきりと私の脳裏に浮かび上がってくる。

旅に出て、どんなに体が疲れていても、どんなに心が弱っていても、あたたかく迎えてくれるわが家の灯りを想えば、ほのぼのとした心地になれる。

もう三十数年も前のことである。島の古老の家を訪ねいろいろ話を伺って、帰路についた深夜のことで

ある。闇夜を歩く私の目に提灯の灯りが見えたので足を速めたその時である。あつという間に溜池に落ちてしまったのである。やつとの思いで這い上がり前方を見たら提灯の灯りが止まっていた。

「あの溜池の前を通る時は、ちょっとでいいから頭を下げるんだよ」と行った母の言葉を思い出した。誰も見ている者はいないのを幸いに溜池に私はお辞儀をした。途端に提灯の灯りが視界から消え、道路が確認できたのである。

この事実を人は幻影、あるいは錯覚だろうと一笑に付すだろう。だが私にとって現実に体験した忘れることのない事実なのである。あの瞬間、あの場面を想う時、必ず母の面影が浮かんでくる。

今とは違って私の子供のころはよく停電した。停電になると、母はごく自然に仏壇からローソクを取り出し、皿のふちへ蠟を垂らしてから、そこへローソクを立てた。ローソクの炎のゆれる薄明りの中で、母はいろいろな話をよく聞かせてくれた。幼いころの思い出ばなしや、酒好きだった祖父の逸話、福島の舟幽霊など、思い出すままに語ってくれた。死とは、あの世へ行くことであり、あの世とは西方にある遠い世界で、あの世とこの世の間には、三途の川があり、死んだ者はこれを渡っていくと。不意に停電が終わると、母は話を途中で切り上げてしまうのである。今にして思えば、明るい中では照れ臭い話題だったのだろう。私はその続きが聞きたくて、次の停電を祈るような気持で待ったものである。日々の生活も楽ではなかった母も、ローソクの炎の中では実に幻想的でいい顔をしていたように思う。母はいつさい愚痴をこぼさなかった。運命に素直に従う芯の強さがあったのではないかと思う。

貧富や社会的地位、男女の差もなく、人はみな同じように老いていく。真夏日に庭の草を取りながら、

年齢とともに、体力が衰え、持続力が無くなったことを実感するようになった。街中でウインドーに写る自分の姿にハツとさせられることがある。そこにいるのは紛れもないくたびれたひとりの老人の姿である。私は慌ててウインドーから目をそらし、ちよつと寂しい気分になる。

食べて生きていられればいいという戦争と貧困の時代は遠く過ぎ去って、人はそれぞれにいろんな人生を送る。

少年時代に下宿させてもらった年長の従兄弟の病が重いと聞いたのは、昭和四十年の秋ではなかったかと思う。

世話になっていた当時、わが家は貧しく下宿代も殆んど払うことができなかった。そんな私に

「心配せんでいいよ、俺はあんたの両親に若いころさんざん世話になったと、なあんにも遠慮することなかよ」とよく言った。私は家の掃除は勿論、買物、お使い、幼い二人の男の子の遊び相手をした。無類の酒好きだった彼を飲み屋まで何度も迎えに行ったものである。酔ってなかなか帰ってくれない彼に私は幾度も泣かされた。一番辛かったのは、二人の男の子のいたずらだった。学校の宿題をやっている私の後頭を尺竹で叩く、ノートを破る、鉛筆は折る、世話になっていたので我慢するしかなかったが、たまりかねて私は両親が留守の時、次のことをやってのけた。

二人を前にして「どっちが強いかなあ」と言う、僕が強い、僕が強いと激しく言い争った。そこで兄の頭を軽くコツンと打って「うんこれは強い、兄ちゃんがやっぱ強い」と言う、負けじと弟の方が頭を突き出した。しめたと少し強く打って「いやあーこっちが強かあ」と言う、兄が又頭を差し出した。日

頃の仕返しはこの時とばかり、げんこつの力をだんだん強めていきながら何度も繰り返した。負けん気の強い二人は痛さをこらえ辛抱していたが、あまりの痛さに涙がこぼれ落ちてきた。私は嬉しさで目頭が熱くなった。

以来「どっちが強いかをやろう」と言うのと、二人はあわてて逃げるようになり、私は楽になった。

帰郷した折、このことを父に話したら、叱るのを忘れて声を立てて笑った。母は呆れたような顔をした。

私は二十五年ぶりに川に沿った道をゆっくりと歩いて、彼の家へ向かった。玄関の戸を開けて声をかけると、奥の方から元氣のない返事があつた。うす暗い部屋で彼はローソクを点した仏壇の前に床をとり横になつていた。ローソクの灯りに照らし出された顔は、げっそりとやつれ、かつての生き生きとした輝きはなかつた。以前の野生的な印象にほど遠い、弱々しい表情に変わつていた。思いもよらぬ不運な病に見舞われた彼にとつて、私の不意の訪問は大きな喜びだったのでろう。「諭吉さん、よう来てくれたね、酒も飲めんごとつて、もうお終いばい、あんたが飲み屋に迎えに来てくれたあのころは、よかつたなあ、この封筒はなんなあ、えーっ、二十五年前の下宿料！」私が差し出した少し厚みのある封筒を見て、彼は呆然となつていた。彼は顔を上げ、流れる涙を拭きもせず私にこう言つた。

「よう顔を見せておくれよ、もう生きて再び見ることもないだろうから、あの世へ行つて自慢話ができるばい、三途の川の渡し賃はいらんだろうが、残つた者が助かるし、ありがたく頂くよ、こがん気持のよかことは久し振りばい、夢のごたる、二十五年前の下宿料なあ、家内が帰つたら驚くじやろうなあ、これ仏壇に上げておくれ」時々、肩で息をつきながらの言葉であつた。私は彼の言葉になん度もうなずき返し

た。苦しみを抑えて実に穏やかな彼の態度であった。ローソクの炎が静かにゆれている仏壇に掌を合わせると、彼の不運が傷ましく、新たな悲しみが湧いてきた。

奥さんは彼の病の治癒を願って、神社に祈願に行っていたのである。病気を信仰心で全快させるなど、およそ非科学的な発想であるがさりとて医術ではよくならないもどかしさを、神仏に祈願する心情は理解できる。

彼の死を早めたひとつの原因は、どっちが強いかの弟の方が若くしてこの世を去ったことにある。この衝撃がいかに大きく深いものであったかは、その病状が如実に語っていた。

沖繩には門中墓と呼ぶ一族の大きな墓があるとか。罪を犯した者は入れぬことになっている。よき社会人になれと教えているのである。親より先に死ぬ子も、親不孝者としてこの墓には入れない。不憫な思いがするが、体を大切にと戒めているのである。

別れの言葉を交わし外へ出ると、秋の終わりの風は冷たかった。

ふり返ったその瞬間であった。病の身で窓ぎわに立った彼が首に巻いていたタオルをとり、私に向かって深々と頭を下げたのである。ガラス戸越しにこれを凝視した私は、彼のこの世での最後の挨拶を感じた。

帰りのバスの窓外はすでに暮れていた。遠くの人家の灯りを見ると、彼の人生の浮沈がまた思われ、もつと早く訪問を思いつけばよかったと、後悔の思いで胸がしまった。

